



OMRON

日本高血圧学会 第2回臨床高血圧フォーラム

# モーニングセミナー(MS-4)

日時 **5月26日(日) 8:10~9:00**

会場 **JP TOWER Hall & Conference**  
第4会場 [カンファレンスルームB1 (5F)]  
東京都千代田区丸の内2-7-2

座長 **光山 勝慶** 先生 (熊本大学大学院生命科学研究部(医学系) 生体機能薬理学分野 教授)

家庭血圧を指標とした診療  
—有用性と課題—

演者 1 **土橋 卓也** 先生 (国立病院機構九州医療センター) 高血圧内科 科長

クラウドシステムを用いた血圧管理は我々を救うのか  
—実地臨床医の憂鬱の中で—

演者 2 **宮川 政昭** 先生 (宮川内科小児科医院 院長)



# 家庭血圧を指標とした診療

## —有用性と課題—

国立病院機構九州医療センター 高血圧内科

土橋 卓也

診察室外血圧、特に家庭血圧は再現性が良く、仮面高血圧など心血管リスクの高い病態を検出する意義も大きいことから、高血圧診療の指標として用いることが推奨されている。わが国において、家庭血圧計は広く普及しているが、測定条件、特に測定回数や評価に用いる値などが必ずしも標準化されていないことが課題と言える。

日本高血圧学会による家庭血圧測定の指針第2版では、家庭血圧の測定時間と測定回数に関して『朝・晩(就寝前)それぞれ1~3回』としている。また、評価には各1回目の測定値の5日以上 of 平均値を用いることを提唱しているが、複数回の測定値を用いて評価することも運用上可能としている。患者にとっては、2回目の測定値が1回目より低値となる場合が多いことから、2回測定することが多いと思われる。実際、われわれが、一機会に通常測定する回数を調査したところ、2回と回答したものが、もっとも多かった。また実臨床において何日間の測定値を評価の対象として用いるかについても頭を悩ますことが多い。長期間の平均をとることで予後予測能が上昇すると考えられるが、1週間程度の平均を用いるのが現実的であろう。

家庭血圧を指標として用いるという議論は、患者自身が全ての測定値を正しく記録し、報告するという前提に基づいている。すなわち、患者自身の選択バイアスを除くことが重要であり、そのためには、プリンターによる出力、電子メモリーによる記録などにより、全測定値を記録することが望ましい。最近、電子データとして記録した測定値が電話回線やインターネットを経由して転送され、医療判断の手段として用いられるようになった。特に、自動電送システムを用いることにより、患者が通信モジュール搭載の血圧計で測定するだけで、医師は選択バイアスのない正確な測定値と分析データを閲覧することが可能となった。今後、高血圧診療の指標としての家庭血圧情報を正確に提供するツールとして利用されることが期待される。

# クラウドシステムを用いた血圧管理は我々を救うのか

## —実地臨床医の憂鬱の中で—

宮川内科小児科医院

宮川 政昭

高血圧診療において家庭血圧が推奨されて10年余りが経った。白衣効果に代表される院内環境の影響を受けず、データ量が豊富で、患者の意識改善にも役立つことから急速に普及した。家庭血圧は、24時間自由行動下血圧のように短周期変動を捉えることは難しいが、日間変動・週内変動(曜日の依存性)・季節変動など、中長期の血圧挙動を捉えるのに優れる。

患者の血圧は、絶対値としての血圧値とゆらぎとしての変動であり、それを修飾するのが患者特性であろう。時の流れを意識すれば、時間としての横軸と絶対値の縦軸に注目しなければならず、診察室血圧のみでなく、診察室外血圧を如何に正確に捉え得るかということに注目しなければならず、そのためには家庭血圧を用いて患者固有の血圧状況を把握しなければならない。

しかしながら、患者によって持ち込まれる家庭血圧データが、現在どの程度診療に活かされているかと言えば、充分と答えられる実地医家はそう多くはあまい。患者が測れば測るほどデータ量が増し、そこに含まれる有用な情報量も増える反面、医師はその分大量のデータを読み切れなくなる。ここに実地臨床医の憂鬱が存在する。

しかし、これは単に情報が整理されないまま持ち込まれるからに過ぎず、適切に集計することで、データの活用度は大きく改善する。問題は、誰がその集計をするかである。医療側でその時間を割くのは困難であろうし、患者に指示しても信頼性が問題になる上、血圧測定を継続する意欲を損なう怖れもある。ここにまた実地臨床医の憂鬱が存在する。

降圧治療の原則は、24時間にわたり血圧レベルを安定させるばかりでなく、正常血圧変動に血圧を同期させることにあり、実地医家においては目の前の患者個々の血圧日内変動を考慮した治療に配慮しなければならない。

これを解決する手段の一つとして、携帯電話回線とクラウドシステムを応用した血圧管理サービスが開始された。これは家庭血圧測定の都度、サーバに自動送信し、かかりつけ医が集積されたデータと共に、種々の分析結果を随時閲覧できるようにしたものである。単なる数字の羅列ではなく、各種変動性が視覚的に表示されるため、これまで読み取れなかった種類の血圧挙動まで捕捉できるようになった。

本講では、自験例を中心に紹介しながら、この種の血圧管理サービスをどのように高血圧診療に活用し、実地臨床医の憂鬱が解消出来るかを考える。